

誤解だらけの天文学史 ～「古代インドの宇宙観」を例に

京都大学 大学院 文学研究科 博士後期課程 廣瀬 匠

研究テーマ：天文学史、特に古代インドの天文学

(星のソムリエ京都事務局 / 元 アストロアーツWeb編集者 / 京都産業大学神山天文台学生ボランティアチームOB)

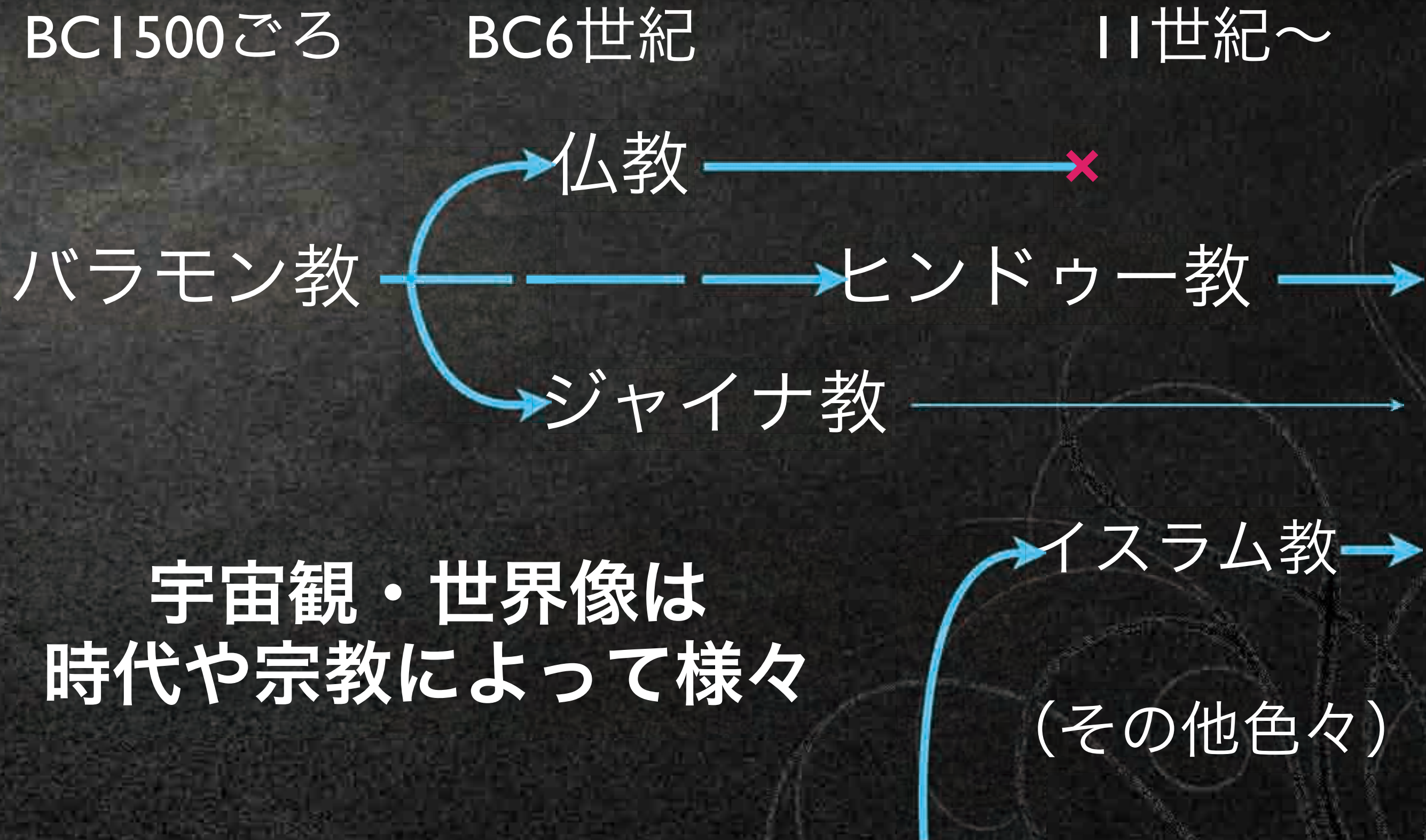
こんな事が書かれた
文献は古代インドに無い！

JSTのオンライン教材「理科ねっとわーく」より

いわゆる

「古代インドの宇宙観」

インドの主な宗教



佛教の 典型宇宙 観

須弥山

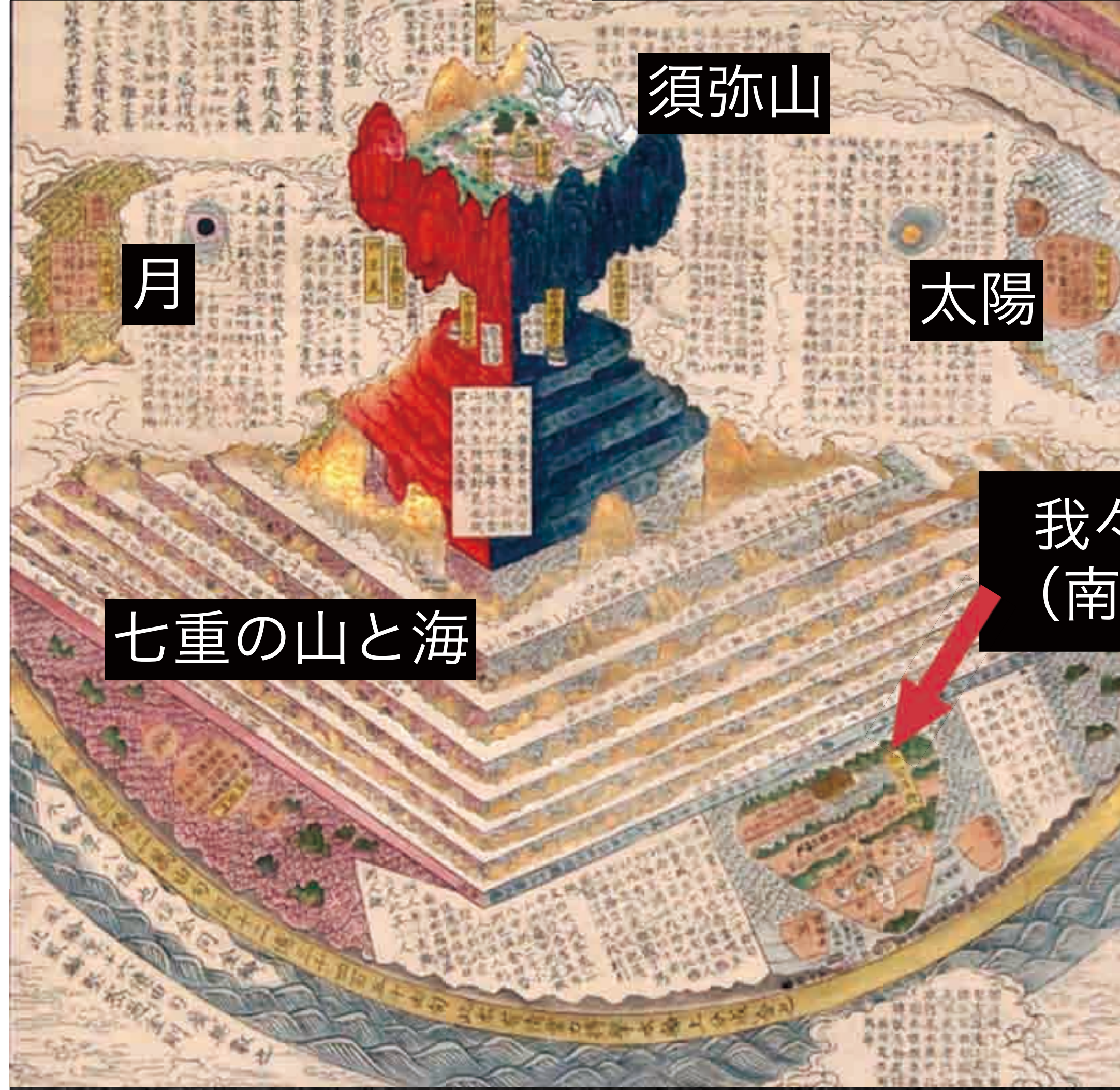
太陽

月

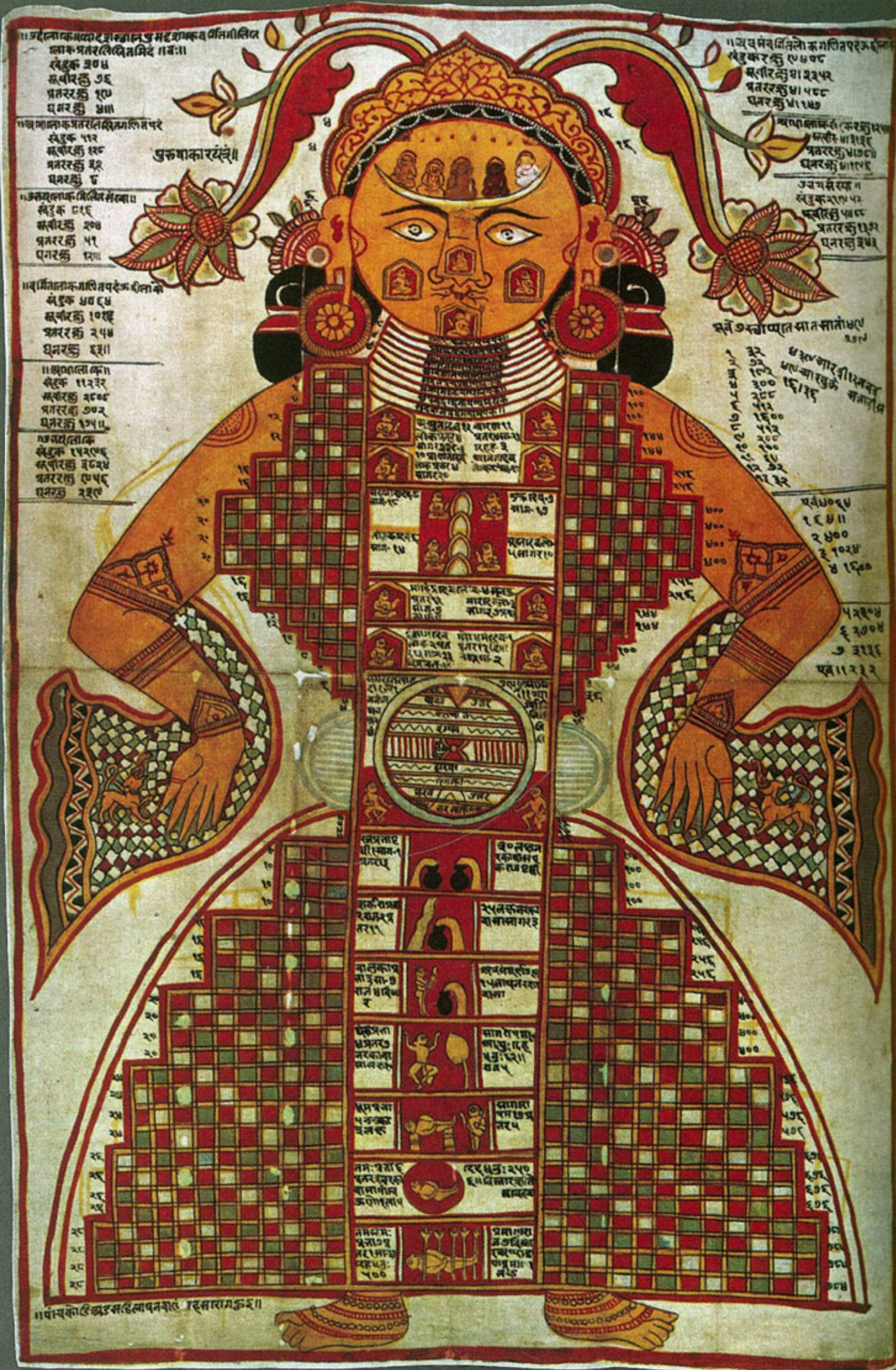
我々の大地
(南閻浮提)

七重
の山と海

金輪
水輪
風輪



上半身が天国、
腹部がこの世、
下半身が地獄



ヒンドゥー教① 象がいる宇宙観

地上界の**四**方
あるいは**八**方
または**十**六方
を支える象たち



ヒンドウー教② 亀がいる宇宙観 「乳海攪拌」



ヒンドウ教③ 蛇がいる宇宙観

ナーガ＝多頭の蛇

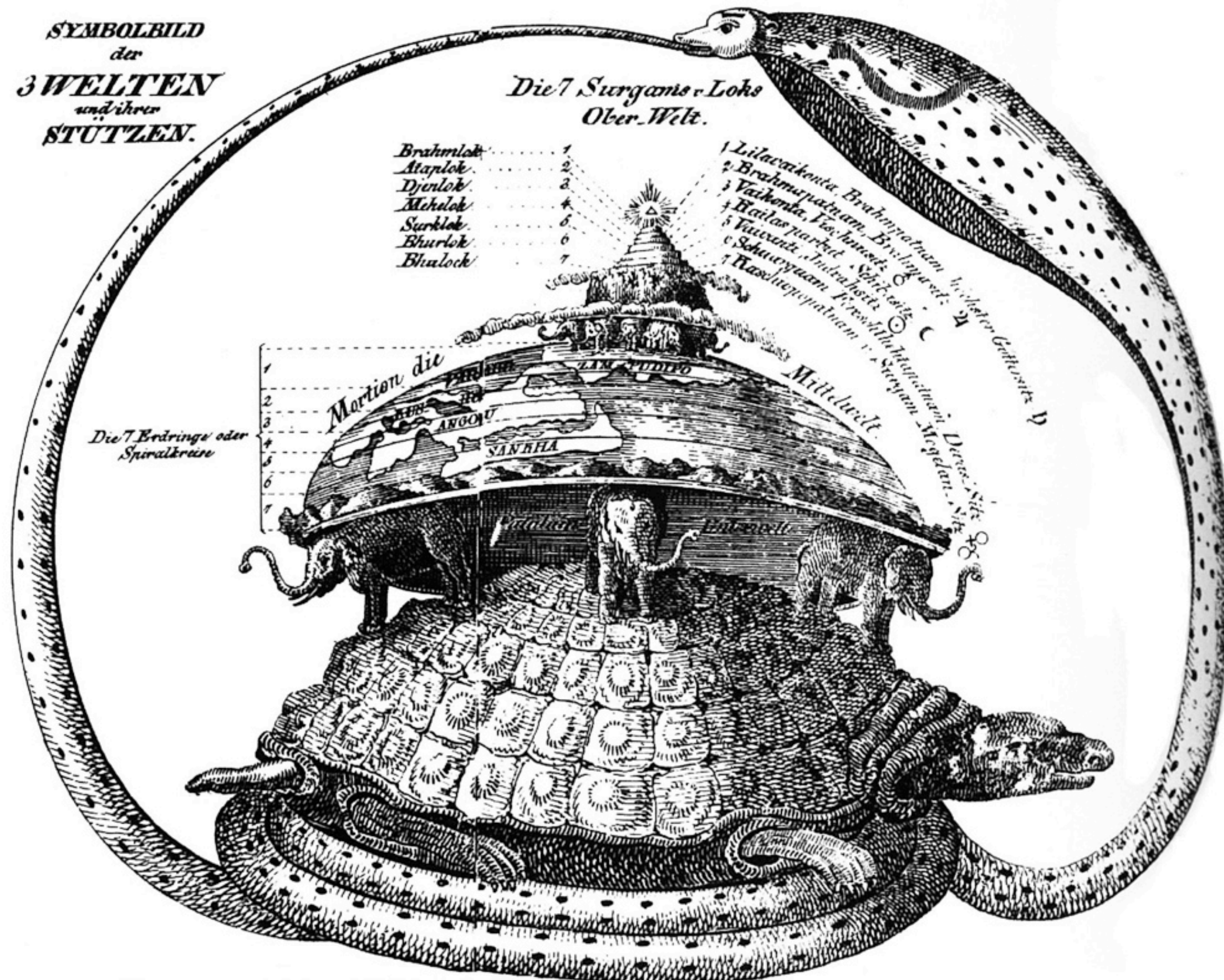


では、この「宇宙観」は
いつ誰が「作った」？



Die 21 Welten tragende Schildkröte, ruhend auf dem Symbol Schutzes und der Ewigkeit, auf der Weltschlange Seschat.

SYMBOLBILD
der
3 WELTEN
und ihrer
STÜTZEN.



ジョン・ロック 「人間知性 論」

(出版は17世紀末)

(大地もこれを載せるある事物を求めると想像した) 哀れなインド哲学者がこの実体ということばをかんがえついたとさえしたら、苦労して大地を支える象や、その象を支える亀を見いだすに及ばなかっただろう。

大槻春彦訳 (岩波文庫) より

広まった経緯

- ・ 16～17世紀の宣教師が最初に西洋へ紹介
- ・ 「非キリスト教」「時代遅れ」の偏見
- ・ ロック以降、たびたび哲学者が言及
- ・ 誤った宇宙観の典型例として定着？
- ・ 日本で広まった経緯については未解明

誤解はこれだけではない

そもそも、宗教的な宇宙観と
当時の天文学における知見は別

「地球はどこから見てもまん丸」

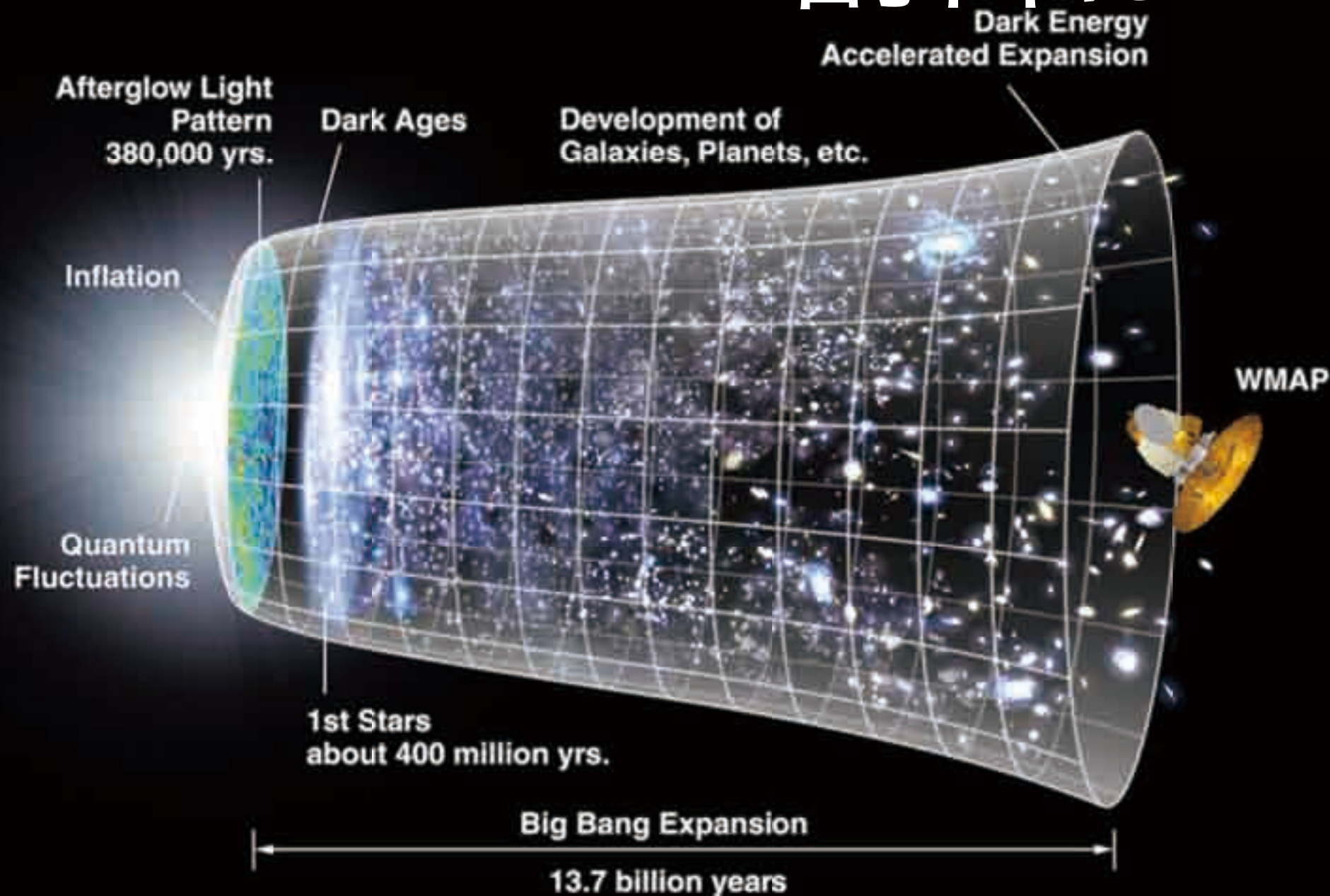
アールヤバタ（476～550年ごろ）



2～4世紀のインドには先進的な
ギリシャ天文学が伝わっていた

...「でも一部の人だけ」って思いました？

「現代の宇宙観」をちゃんと理解している現代人の割合は？



先人への正しい理解と
リスペクトあってこそその
「温故知新」です！